

Edith Wharton, *The Reef*

—カタルシスとしてのコンメーディア・デラルテ—

山 口 志のぶ

序

1862年、ニューヨークの裕福な家庭に生まれた Edith Wharton は、23歳で結婚し、欧米を往復する生活の中で、1894年に神経衰弱の治療法として執筆を始めた。その後、人気作家として地位を確立したウォートンは、主に社会の因習と個との相克を主題とする数多くの作品を書いた。しかし、1912年に発表された *The Reef* (『暗礁』) は、主人公の精神的葛藤に焦点を絞り、心理のドラマを描いている点で、また劇作の手法を導入したと言えぬまでも、物語の主題に相応しい形式として演劇の要素を取り入れた形跡が見られる点からも、異彩を放っている。これらの特徴から、しばしばジェイムズ風と指摘されるこの小説について、Henry James がウォートンに宛てた手紙の中で、この作品には“the psychologic Racinian unity”が見いだせると述べていることも事実である。¹ このようなジェイムズの批評を取り上げて、Helen Killoran は、*The Reef* とギリシャ悲劇とを関連づけた考察を行なっている。² 一方、ウォートン自身は、自伝の中で “the material limitations of the stage, and its violent foreshortenings, which always contract my vision, and cut rudely into my dream. . .” と述べているように、劇作の手法を小説に応用しようと考えたジェイムズほどには、演劇に対する積極的な興味を示していない。³ それならば、なぜウォートンは *The Reef* に演劇的要素を織り込んだのであろうか。

筆者はこの問題を取り上げるに当たって、執筆当時、作者が置かれていた状況を詳細に検討することから始めた。その結果、ウォートンが自伝的作品として *The Reef* を書き、それに統一感を付与し、主人公たちの陥るディレンマを効果的に演出するために、Commedia dell'arte⁴ を採用しているのではないか、という仮説が導き出されたのである。そこで、本稿では、数多くの批評家たちによって様々に論じられてきたソフィーの役割に注目して、*The Reef* と作者の経験およびコンメーディア・デラルテにおける定番の道化芝居『二人の主持ちのアルレッキーノ』(*Il Servitore di due Padroni*) との関連性を検証し、この物語の主題を明らかにするとともに、作者にとってこの作品の執筆が如何なる意味を持っていたのかという問題について考察する。これはウォートンの伝記作者 R.W.B. Lewis や Shari Benstock ならびに *The Reef* に Racine の *Oedipe* の悲劇を見いだした Killoran⁵ も試みていないアプローチである。

1. 執筆当時の背景：*The Reef* とイタリア

1912年5月中旬、イーディスは5ヶ月間にも及ぶ長期の旅行に出発した。*The Reef* は彼女が最初に逗留したイタリア北部エミール・アロマーニャ州のサルソマッジョーレ (Salsomaggiore) で、その三分の二が書き上げられた。当時、イーディスは、女性問題や金銭問題に加えて精神的に病んでいた夫の Edward Robbins Wharton と破局を迎えてい

た。⁶ エドワードの躁鬱病は世紀の初め頃にはすでにその徴候が見られたのだが、1904年から数年間の安定期間を経て再び発病し、1912年に至るまで友人や親類との旅行を通して様々な場所で治療を試みたが回復することはなかったのである。

時を同じくして、イーディスは *Times* のパリ通信員を務めていたアメリカ人 William Morton Fullerton と親密な関係にあった。1907年の秋、二人はヘンリー・ジェームズを介して出会ったのである。自伝にも一切言及されていない二人の交際をつきとめた R.W.B. Lewis によれば、彼らの深い関係は1910年の夏まで続いていたという。⁷ しかし、事実上の交流はその後も継続していた様子で、この長期に渡る傷心の旅行から遡ること一年前、奇しくも同じ5月、同じサルソマッジョーレの地から、イーディスはウィリアムに宛てて、“I wish I had known you when I was twenty-five.”と書き送っている。⁸ その一年後、彼女は当地で *The Reef* を執筆し、大団円へと進展する後半の三分の一を残したところで、ウィリアムに草稿を送り「結末は分かっているが一人では続けられない」と告白しているのである。Shari Benstock によれば、小説の創作にあたってイーディスが他者に助言を求めたのは、この一度だけであるという。⁹ それに対して、彼の意識はむしろ二人の過去の関係が公になることへの恐れにあったようだ。

彼女が知り合った当時、彼は複雑な女性問題を抱え、さらには従妹の Katharine Fullerton とも婚約中であつた。ウィリアムの気持ちはこの二人の女性の間で揺れ、イーディスは彼の不誠実な態度に悩み、怒りを覚えながらも彼の魅力に惹かれた。この問題はのちに詳しく述べるとするが、結局のところキャサリンは別の男性と結ばれ、イーディスもウィリアムと別れた。そして、*The Reef* の執筆の直前に、夫との関係も修復不可能となる。1912年3月、病んだ夫に太陽と新鮮な空気を与えようとイーディスが計画したヨットの旅が、エドワード自身によって拒否された後、その代用として出かけた小旅行から戻ってきたイーディスを待っていたのは、文字通り一人きりの部屋であつた。その間に、彼はアメリカに帰国してしまつたのである。¹⁰

その後まもなく訪れたイタリアの地で、彼女の心に去来したものは何であつたろうか。この数年間に経験した男と女のドラマ、運命の過酷さだろうか。1905年に刊行された随筆、*Italian Backgrounds* の中で、彼女は Parma の寂れた劇場でかつて演じられたであろうコンメーディア・ダルテの幻想を抱いているが¹¹、*The Reef* の着想の源は、おそらく運命の女神に支配される人生、あるいは人生という即興劇の中で道化を演じる自分への自嘲なのではないだろうか。この作品が発表されて間もない11月23日付の書簡で、イーディスが友人の Bernard Berenson に “I'm sick about it [*the Reef*] . . . Please don't read it!” と書き送り、その6年後の8月29日には、文芸評論家の William Cray Brownell に宛てて “I put most of myself into that opus.” と述べていること等を取り上げて、R.W.B. Lewis は *The Reef* を彼女の著した小説の中で最も自伝的な作品と位置づけている。さらに、この小説の主人公 George Darrow と脇役 Sophie Viner の結末に、イーディスが付与した残

酷さと “self-punishment” をもルイスは見出している。¹²

2. 自己投影としてのソフィー： “rain” and “Terminus”

さて、ここで *The Reef* に織り込まれたイーディスの自伝的要素について検証しなくてはならない。そのためには、脇役の Sophy Viner がどのように主人公の Anna Leath と George Darrow の運命を決定づけたのかという問題について考察し、それを作者の経験に照合する必要がある。その点に留意してテキストを詳細に読解していくと、小説とイーディスの体験を結びつけるいくつかのキーワードを介して、複雑な男女関係が明らかになる。

The Reef の冒頭は、ロンドンのチャリングクロス駅からドーバーへと向かう列車の中で、「来ないで欲しい」と記されたパリのアンナからの電報の一語一語を暗澹たる気持ちで反芻するダローの姿から始まる。彼は風雨の吹きつける波止場に降り立ち、そこで偶然ソフィーの傘を拾う。婚約者からの二度にわたる訪問延期の電報に失望しているダローは、慎み深く理性的なアンナとは異なる天真爛漫なソフィーの魅力に惹かれる。二人は旅の友として船に乗り込み、パリに向かう。しかし、彼女が頼りとしていた知人夫婦が不在であったために、彼らは “the Northern Terminus” (34) (「北ターミナルホテル」) に宿泊し、土砂降りの雨が数日続く間に、深い関係に陥ってしまう。ダローは罪悪感に苛まれ、“Perhaps but for the rain it might never have happened.” (263) と運命の悪戯を嘆く。これが物語の展開の発端となる出来事である。

R.W.B. Lewis は、ソフィーがイーディスの投影とまでは言及していないが、少なくともこの場面がイーディスの自伝的事実を反映したものであることを指摘している。¹³ 1909年6月、イーディスは両親訪問を理由にアメリカに帰国するウィリアムに付き添ってロンドンへ向い、二人は “the Charing Cross Hotel” のスイートルームに宿泊した。夕食にはヘンリー・ジェイムズも参加し、その翌日、ウィリアムはワーテルロー駅から臨港列車に乗りサザンプトンの港から出航した。その日も物語の背景のごとく「雨」であった。イーディスは恋人の去った後 “Terminus” (「ターミナル」) という 52 行の詩を書いている。その作品には、“Wonderful was the long secret night you gave me, my love, / Palm to palm, breast to breast in the gloom.” や “the pressure of bodies ecstatic, bodies like ours, / Seeking each other’s souls in the depths of unfathomed caresses.”¹⁴ からも明らかのように、二人の情愛を赤裸々に告白した内容が詠われている。また、ダローとソフィーが関係を結んだ the Northern Terminus Hotel の部屋に関する “the featureless dullness of the room” (75) や “the grimy carpet and wall-paper” (76) ならびに “the high-bolstered counterpaned bed” (76) という叙述は、詩 “Terminus” に描かれた部屋の “the common-place room,” “dull impersonal furniture,” “bed with soot-sodden chintz” に相当する。¹⁵

これに先立つ 1908 年の秋、ウォートンはウィリアムの移り氣に不安を覚え、二人の関

係は終わりだと感じていた。¹⁶ おそらく夏の終わりにヨーロッパを訪れたウィリアムの婚約者の Katharine に、彼は再び心惹かれていたのであろう。しかし、冬に至る頃、キャサリンは“that bitter midnight hour”と称した夜を境にウィリアムのもとを去り、フランス中西部のトゥールに逗留したまま、パリに戻れという彼の求めに応じることなくその地で冬を過ごした。この出来事に関してルイスは、ウィリアムがイーディスとの関係をキャサリンに告白したのではないかと推測している。¹⁷ それを証明するかのように、翌年の春、イーディスとウィリアムは復縁し、6月に“Terminus”は書かれた。このような経緯から考えて、*The Reef* のソフィーがダローの恋人の存在に気づいているのと同様に、イーディスはこの頃にはすでにキャサリンの存在を知っていたと思われる。しかも、ウィリアムをアメリカに住む両親のもとに送り出すということは、文字通り、婚約者であるキャサリンに引き渡すということを意味する。彼女は彼の両親が引き取って育てた従妹であったからである。1902年6月、別れの朝、ウィリアムを見送るイーディスの気持ちはいかなるものであったろうか。また、去り行くダローの背中にソフィーは何を思ったのであろうか。

3. 運命：動因としてのアルレッキーノとソフィー

それでは、作品に立ち戻って、ソフィーはこの物語の中でどのような役割を果たしているのだろうか。この点を明らかにすることによって、*The Reef* に描かれている主題についての考察を試みたい。先に、この小説は恋人のウィリアムとの別れ、夫との破局を経験した作者が、その心の傷も癒えぬうちにイタリアの地で執筆した作品であると述べた。さらに、彼女はコンメーディア・デラルテと呼ばれる16世紀中葉にイタリアで成立した即興喜劇に関する知識があったことにも触れた。この点に関して、追記すべきことがあるとすれば、それはイーディスの最初の長編小説 *The Valley of Decision* (1902)の中にコンメーディア・デラルテが描かれている、という事実である。¹⁸ つまり、イーディスは心の安定を得るために始めた創作活動のごく初期の段階から、自身の作品の中にイタリアの古典即興喜劇への関心を示しているのである。そして、*The Reef* で再びそれを採用したとすれば、彼女は人生の節目に至って原点に立ち戻ったと言える。

そこで、注目すべきはコンメーディア・デラルテにおける定番の道化芝居『二人の主持者のアルレッキーノ』である。アルレッキーノとはフェデリゴという主人を持ちながら、有能な下僕であると自ら売り込んでフロリンドにも仕えることになった召使の名前である。この芝居の見所は二人の主に仕えている事実を悟られまいとするアルレッキーノのディレンマと詭弁ならびにそれに振り回される主たちの姿にある。一方、*The Reef* をソフィーの視点から論じれば、雇い主と喧嘩をして勤め先を飛び出したメイドのソフィーが、女優を目指しパリに渡る旅の途中で偶然出会ったダローと束の間の恋に落ち、その後、家庭教師として雇われた家の息子 Owen に求婚され幸せをつかみかけた矢先に、その恋の相手が義

理の父親になる存在として現れたため、愛する二人の男性の間でディレンマに陥り、この出来事に関係する人々もまた苦悩する、ということになる。このように、両作品の筋は多くの点で類似している。

それでは、アルレッキーノとソフィーは、特徴や物語の中で果たす役割において、共通点を持つのだろうか。イーディスは、*The Reef*の主人公アンナを上流階級出身で強い道徳意識に支えられた理性と内に秘めた情熱との間で苦悩する人物として描き、彼女とは相反する人物としてソフィーを位置づけている。彼女は労働者階級の人間であり、ダローが“... the face [Sophy's face] was obviously one to make its way on its own merits.” (12)と見て取ったように、自力で人生を開拓する行動主義者である。そして、“[Sophy is] so clever and amusing” (138)と評されているように、嫌でたまらない奉仕も“the show” (26)を観る楽しみに還元できるような楽観主義者でもあり、古着を新品にみせて上流社会の人々の目を欺く演技力と知恵に恵まれた表現者でもある。また、ソフィーは“Its [Her face's] fugitive slanting lines . . . had the freakish grace of some young head of the Italian Comedy.” (16)あるいは“... [Sophy] speaks Italian.” (138)とも説明されている。これら彼女の特質は、ウォートンがソフィーを“a dryad in a dew-drenched forest” (35-36)と例えて、Shakespeareの*The Midsummer Night's Dream*における妖精Puckを思わせるのイメージを付与したことも含めて、アルレッキーノの特徴と多くの共通点を有していると言ってよいであろう。¹⁹

また、ソフィーの素直さや率直さはアンナとダローの上品な振る舞いや偽善の仮面を剥ぎ取り、白日の下に晒す。自制心の強いアンナが、ダローとソフィーの過去の関係を知り激しい嫉妬心に突き動かされることや、二重の道徳基準を持つダローが、彼を愛するがゆえオーウェンとの婚約を破棄する、と示唆したソフィーに罪の意識を感じていることが良い例である。このように、ウォートンは同質の社会に生きる主人公たちの間では起こり得ない出来事を、彼らとは異なる価値基準によって生きるソフィーを関らせることで巻き起こし、彼女とは対照的な二人の姿を外側から照らし出しているのである。つまり、この物語でソフィーは、アルレッキーノと同様に、一連の出来事の動因としての役割を果たしていると言える。そして、*The Reef*の中心的话题がソフィーのディレンマではなく、アンナとダローの結婚をめぐる心の葛藤であることは、Jan Kottがアルレッキーノであると指摘した妖精パックが、主人公たちの運命を左右する重要な役割を担いながら中心的话题とならないのと同様である。²⁰

また、ヤン・コットが述べた「(パック自身が)偶然であり運命であり、不慮の事件である。偶然はこの場合にはアイロニカルなものとなるが、偶然はそれ自身はそのことに気がついていない。」²¹という言葉はそのままソフィーにもあてはまると言ってよい。*The Reef*の冒頭でダローが訪問の遅延を申し出るアンナの電文を“the dice in some game of the gods of malice” (3)とたえたように、ソフィーこそが悪意の神々が地上に落とした偶然な

のである。したがって、この娘の存在によってどうにもならないディレンマに陥ってしまうアンナとダローの状態こそが、この物語の題名である‘the reef’（暗礁）に思える。さらに、いとこ同士でありながら婚約をしたウィリアムとキャサリン、その間に割って入ったイーディスがソフィーの投影であることをこの小説の内容と重ね合わせれば、“Oedipe” (50) を観劇した後にソフィーが“As if the gods were there all the while, just behind them [the players].” (59) と述べたことや、芝居をあたかも本当に起こっていることのように眺めていたことが、痛烈なアイロニーとなって伝わってくるのである。

4. 自省：運命を紡ぎだす者と「手紙」

アルレッキーノやソフィーが神々からの贈り物であり、その存在自体が運命だとするならば、彼ら自身が紡ぎだす運命もある。その運命を決定づける役目を担っているものが「手紙」である。それは、コンメーディア・デラルテのアルレッキーノとソフィー及びイーディスの自伝的経験の一つに結びつける重要なモチーフでもある。

『二人の主持ちのアルレッキーノ』では、主人のフェデリーゴが恋人を追ってきたベアトリーチェの仮の姿であることを知らないアルレッキーノが、ベアトリーチェ宛ての手紙をもう一人の主であるフロリンドに渡してしまうことから騒動が始まる。フロリンドこそがフェデリーゴ（ベアトリーチェ）の捜し求めていた恋人であったからである。このような手紙の使われ方は *The Reef* においても指摘できる。ダローはソフィーに頼まれた手紙を出し忘れたことを取り繕おうとして、成り行き上、彼女との関係が生じ、彼女がアンナからの手紙を彼より先に受取ったがゆえに、ダローはその手紙を読む前に燃やす結果になったのだ。一方、アンナは手紙に対する彼からの返信がないため、二度目の手紙を投函し、それを読んだダローが彼女の館を訪問するが、結局最初の手紙を読まなかったことをアンナに知られて、二人の間の信頼関係が崩れてしまうのである。

ここで留意すべきことは、偶然ダローがソフィーの手紙を出し忘れたのとは異なって、ソフィーは、故意にアンナの手紙をすぐにダローに渡さなかったという点である。その論拠となるのは、ソフィーが手紙を持ってダローの部屋に入ってくる前に自室に立ち寄り、箆筒や化粧台の引出しをあけて何かを探し出そうとしている音を、ダローが聞いていることである。もし、ソフィーがダローに言ったように、ホテルの従業員から手紙を受取ったのであれば、わざわざ部屋に立ち寄る必要はない。仮にすぐに渡そうとしたが彼が不在であったため一時的に手紙を部屋に置いたのであれば、箆筒や引出しにそれをしまいこむ必要も捜す必要もないのである。何よりも、このような場面を作者が詳細に描いたことにこの描写に対する意味を見出すことができる。したがって、ダローやアンナにとっての偶然は、ソフィーによって故意に呼び込まれたものであると言える。

このように考えると、ソフィーの行動に関して幾つかの疑問がわいてくる。例えば、彼女

はダローの手紙を受取った時、その封筒に“the strong slender characters” (78) で書かれたアンナの名前に気づかなかったのであろうか。さらに、ソフィーはファーロー夫妻がパリ郊外のアンナの自宅 Givré での仕事を紹介するため彼女を探していたことを知って、ダローと別れた直後の6月からアンナのもとで働いていると彼に述べているが、アンナの書いた手紙の厚さやその手紙に関するダローの言い様から、ソフィーはダローがいつかこの館に来ると考えはしなかったか。そのような視点でみれば、ソフィーは彼女の名前が暗示する wisdom や “It’s the money! With me [Sophy] that’s always the root of the matter.” (71) という彼女の言葉から類推して、より抜け目のない意図が彼女の行動に隠されていたとも考えることができる。つまり、アルレッキーノが旅の途中でベアトリーチェをカモとして主に選んだように、ソフィーもまたダローを一時的な “a place to sit on” (365) として考え、生活のために少しでも長くダローと一緒にいることを望んだということだ。

その一方、物語の大団円において、アルレッキーノとソフィーに与えられた結末は大いに異なる。前者が自ら嘘を告白し、ついでに自分も小間使いと結婚しハッピーエンドを迎えるに対して、ソフィーはダローともオーウェンとも結ばれることなく、娼婦の汚名をきせられたまま舞台から降ろされているからである。作者のソフィーに対するこのような扱いに関して、Richard H. Lawson はウォートンが第一部以降、ソフィーに同情を寄せていないと指摘している。²²

イーディスは、なぜこれほどの汚れ役としてソフィーを描いたのだろうか。その答えを導き出す糸口は、*The Reef* を発表する数年前、つまりウィリアムとの関係が終焉を迎えたところに執筆された短編に見出される。イーディスがウィリアムと親密な関係を続けていた当時、キャサリンは婚約中にもかかわらず彼が手紙の返事をほとんどよこさないことに不信感を抱いていた。1909年の12月末、Gordon Gerould という才能ある若き英語教師に求婚された後も、キャサリンは幾度となく手紙を送り返信を求めたが “Wait letter” とある電文のほか数ヶ月もの間、ウィリアムから連絡は無かったのである。その後、ウィリアムは彼女に愛情はあるが結婚を考える状況にないことを伝え、キャサリンはついに翌年の6月、ゴードンと結婚するのである。²³

R.W.B. Lewis は、この出来事をイーディスが同時期に執筆していた短編 “The Letters” (1910) の創作の材料になったことを指摘し、ウィリアムがキャサリンとの問題をイーディスに相談するにとどまらず、彼女の手紙さえ見せていた可能性を指摘している。²⁴ その論拠の一つが、この物語の主人公の Lizzie と深い仲となった Vincent が、亡き妻の財産を処分するためにアメリカに渡った後、リジーからの手紙をことごとく無視し続けることである。また、思いがけなく遺産を手にしたリジーが、再び現れたヴィンセントと結婚した後、アメリカで宿賃未払いのまま家主の所へ置いて来た彼のトランクを取り戻す金を用立て、かつて自分が出した手紙を開封さえしていなかった彼の不誠実さも許す点で、ルイスはリジーをイーディスの投影と見なしている。事実、イーディスはウィリアムの名誉を危うくす

る手紙を彼のかつての恋人 *Henrietta Mirecourt* から買い戻す金を用立て、彼の不誠実さを知っても、一度は愛し合った者として彼を許したからである。²⁵ 同時に、冷遇されるキャサリンと慈悲深いイーディスという図式は、作者のキャサリンに対する嫉妬とリジーに投影された自身の美化をも示唆している。

このように考察してみると、*The Reef* は自伝的要素に加え「手紙」というモチーフによって結ばれ、“*Letters*”の延長線上に位置する作品であると言える。しかし、*The Reef* の執筆時におけるイーディスのウィリアムを見る目は、“*The Letters*”におけるそれとは、おそらく異なるものであったろう。少なくとも、イーディスは、キャサリンも自身と同様にウィリアムの気まぐれな愛し方に苦悩していたことを、はるかに冷静に考えることができたはずである。事実、キャサリンの処女作 *Vain Oblations* (1914) を刊行するに際して、イーディスは助力している。²⁶ そのように考えれば、*The Reef* におけるソフィーへの冷遇は、自己投影した人物を介した作者の自省を反映したものと思える。

5. 階級社会への冷笑

ヤン・コットは「(アルレッキーノは)召使とはいふものの、実は誰にも仕えておらず、相手をかまわず好きな所へ引きまわすのである。商人も恋人も公爵も兵士も、すべて冷笑してかかる。」「彼は悪賢いようにしか見えないが、実はそれだけでなく、主人よりも知恵がすぐれているのである。世界が愚考の塊にしかすぎないことを悟っている彼は、何者にも縛られていない。」と述べている。²⁷ それでは、ソフィーがアルレッキーノを演じた舞台設定とはどのようなものであったのであろうか。また、その世界を彼女はどのように見なしていたのであろうか。主人公たちとソフィーとの違いを明らかにすることで、この問題に取り組んでみたい。

ダローの特筆すべき性格上の特徴を挙げるとすれば、良家出身のプライドの高い人物であることに加えて、“*George Darrow had had a fairly varied experience of feminine types, but the women he had frequented had either been pronouncedly “ladies” or they had not.*” (26) という説明によって明らかなように、二重の道徳基準を持ち主であると言える。そのため、彼はソフィーとの関係を“*a moment of folly and madness*” (328) と割り切ろうと考える。しかし、道徳意識の高いアンナには自分のそのような一面が理解できないだろうと考えるダローは、ソフィーとの関係がアンナに発覚することによって彼女から蔑まれ、自身のプライドや体面が傷ついてしまうことを恐れている。

アンナもまた淑女としてのプライドが障害となり、内面に激しい情熱を抱きながらも、自身の感情を素直に表に出すことができず儀礼的な態度をとってしまう人物である。その背景には、彼女が道徳的に厳しいアメリカの上流社会の出身であること同時に、恵まれた環境に起因する経験不足と自信のなさが存在する。したがって、アンナは、ダローの不誠実

を察知しても、真実を知りたいが怖いという彼女の感情と相まって Killoran が指摘しているように文字通りプシュケーのディレンマに陥ってしまう。²⁸

問題となるのは、彼女が最後まで上流社会の“measure” (134)で人間を測る見方から逃れられないということである。一連の騒動が持ち上がる以前には、アンナはソフィーに対して身分は低くても信頼をおいていた。しかし、物語の大団円で、ソフィーを訪問したアンナが、そこで墮落したソフィーの姉の Laura と遭遇した時、姉妹の外見上の類似を理由に、いとも簡単にソフィーも姉と同様に不道德な人間にちがいないと判断してしまうのである。そのような考え方が、偏見に満ちたものであることは、“The Farlows, who had ever “been decent” about Laura” (25) というソフィーの言葉によって明らかである。

一方、ソフィーはこのような上流社会の偽善性や高慢さに反感を抱く人物である。パリのホテルでダローが自分の庇護を受けるように申し出た時、彼女の顔が “a small malevolent white mask” (68) となったがその良い例である。また、第 2 章でソフィーがダローに述べた “I [Sophy] was envious of Lady Ulrica ... Oh, not on account of you [Darrow] or Jimmy Brance! Simply because she had almost all the things I've always wanted.” (19) という言葉も非常に唆的である。Jimmy Brance とはソフィーのかつての恋人であり、ダローと同様に Lady Ulrica に恋焦がれていたのである。つまり、この男もダローと同様に二重の道徳意識の持ち主であり、ソフィーは二度にわたってまともな恋愛の相手として扱われなかったということになる。したがって、ダローとパリで見た “Oedipe” から多大な知識を得たソフィーが、偽善的な上流社会に対して一矢報いる気持ちから、期せずして義理の父親と結ばれた花嫁という筋書きを思いつき、自身はアルレッキーノのごとく動因としての役割を見事に演じきった、と解釈しても不思議はないのである。

最後に、*The Reef* の結末はいわゆるオープンエンディングとなっており、作者は登場人物たちのその後について何も語っていない。しかし、自身のプライドを守るため、ダローを諦めた旨を伝えようとソフィーを訪ねたアンナが、一足先にソフィーが旅立ったことを知って、彼女のほうがソフィーからダローを譲り渡された結果となったことを考えれば、ソフィーの悪戯は成功を納めたと言えるだろう。また、多くの批評家が論じているように、アンナはソフィーを娼婦のような女と見なして、結局こんなものかと納得していることから、この度こそダローを追いかけていくように思われる。この推論を裏付けるかのように、『二人の主持ちのアルレッキーノ』の結末は、アルレッキーノの詭弁によってお互いが死んでしまったと思ひ込んだフェデリーゴ (ベアトリーチェ) とフロリンドが、自殺を図ろうとしているところを人に制止され、もみ合っているうちに背中が触れてお互いを認知し結ばれるのである。

一方、ソフィーは姉の家にかつての恋人ジミーを残し、以前の主 Mrs. Murrett に再び雇われインドへと旅立ったことから推論すれば、たとえダローが彼女を引き止めたとしても、彼女はよりを戻そうとはしなかったろうと想像できる。彼女は “I'm [Sophy is] not so

sure that I believe in marriage. You [Darrow] see I'm all for self-development and the chance to live one's life. I'm awfully modern, you know." (62)とダローに述べたとおり、物事に対して何の偏見もこだわりもないのである。

以上のことから、Richard H. Lawsons が指摘するように *The Reef* の主題の一つは社会的階級の問題であり、²⁹ 作者はアンナやダローと相対する人物としてソフィーを配し、彼女が動因となって生じる主人公たちのディレンマを描くことで、社会や階級意識の枠から不可避の人間を揶揄しているのだと考えられる。また、先に引用したソフィーの言葉の中に、当時の上流社会の慣習に準じて職につかなかった夫とは対照的に、作家として自立し人生を自らの手で切り開いたイーディスの自負と結婚生活への幻滅を読み取ることができる。そして、Shari Benstock や R.W.B. Lewis が指摘するように、アンナの経歴や性格がイーディス自身と類似していることに加えて、³⁰ この作品の執筆直前に夫との関係が修復不可能になったにもかかわらず、体面を保つために、翌年まで離婚できなかった事実を考慮すれば、*The Reef* を介してイーディスは、暗にそれを彼女に強制した上流社会を批判し、同時に、自由闊達なソフィーに自己を投影して、自身が果たしえなかったその社会からの解放を成し遂げているとも言える。

結 び

イーディスは、かつてコンメーディア・デラルテの幻想を抱いたイタリアの地で、この数年来、我が身に起きた出来事を回想しながら、*The Reef* を執筆したのであろう。その思い出とは、運命に翻弄される男と女の恋愛劇であり、様々な拘泥や社会的束縛から抜け出すことのできない愚かな人間が織りなす喜劇そのものである。そして、それこそがイタリアの古典喜劇でいにしえより演じられてきた題目に他ならない。時が過ぎ時代が変わろうと、人間の本質は少しも変わることがない。イーディスがこの小説を自伝的な色彩に富んだコンメーディア・デラルテに仕上げたのは、おそらくこのようなところにあると思う。

そして、*The Reef* で主人公たちにとって偶然であり運命そのものとなって一連の出来事と呼び起こし、動因としての道化を演じたソフィーに、ウィリアムと彼の婚約者キャサリンとの破局に係わった自分自身を投影し、自省を込めて自身の内的告白をしている、と考えられる。また、社会的偏見と階級意識から逃れられない主人公たちに一矢報いるソフィーの姿を描くことによって、作者は自身の属する偽善的な社会を揶揄嘲弄し、ソフィーに束縛のない生き方を選択させたことによって、作者自身の果たせなかった社会からの解放を遂げさせていてもいるのである。したがって、*The Reef* は、保守的な古きニューヨークの上流社会に生き、道ならぬ恋に破れ、夫との破局をも経験した作者のカタルシスのための作品であったと思われる。

本稿における *The Reef* からの引用は、すべて *The Reef*. New York: Charles Scribner's Sons, 1965. により、本文中には頁数のみを記すこととする。

1. Edith Wharton, *A Collection of Critical Essays*, 149.
2. Helen Killoran, *Edith Wharton: Art and Allusion*, 28 - 41.
3. Edith Wharton, *A Backward Glance, The complete Works of Edith Wharton*, 205, 309 - 310.
4. Commedia dell'arte とは 16 世紀中葉にイタリアで成立した即興喜劇である。役者はしばしば仮面を被り即興で台詞を言った。17 世紀初頭にはフランスへ導入されている。「コメディア・デラルテ」とも言われるが、本論では、山口昌男著『道化の民俗学』の中で用いられた「コンメーディア・デラルテ」という表現を採用した。(山口昌男著『道化の民俗学』5。)
5. Helen Killoran, *Edith Wharton: Art and Allusion*, 34.
6. Shari Benstock, *No Gifts from Chance: A Biography of Edith Wharton*, 263 - 266.
7. R.W.B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, 265 - 293.
8. Edith Wharton, *The Letter of Edith Wharton*, 289.
9. Shari Benstock, *No Gifts from Chance: A Biography of Edith Wharton*, 266 - 267.
10. R.W.B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, 248 - 250; Shari Benstock, *No Gifts from Chance: A Biography of Edith Wharton*, 263 - 266.
11. Edith Wharton, *Italian Backgrounds, The Complete Works of Edith Wharton*, Vol.5, 122 - 123. なお、ウォートンの“commedia dell'arte”に関する興味は、彼女がイタリア旅行に携帯していた Vernon Lee の著した *Studies of the Eighteenth Century in Italy* によって刺激されたのではないかと Sarah Bird Wright は指摘している。(Sarah Bird Wright, *Edith Wharton A to Z: the Essential Guide to the Life and Work*, 1998.)
12. R.W.B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, 325 - 326.; Letter to Bernard Berenson, Nov. 23, 1912 of R.W.B. Lewis & Nancy Lewis ed., *The Letter of Edith Wharton*, 284.; Letter to William Browell, Aug. 29, 1918, Wharton Archives, Amherst College. quoted in Cynthia Griffin Wolff, *A Feast of Works: The Triumph of Edith Wharton*, 218.
13. R.W.B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, 326.
14. R.W.B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, 259.
15. R.W.B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, 326.
16. Sarah Bird Wright, *Edith Wharton A to Z: The Essential Guide to the Life and Work*, 91.
17. R.W.B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, 248 - 249.
18. Sarah Bird Wright, *Edith Wharton A to Z: The Essential Guide to the Life and Work*, 247 - 248.
19. 山口昌男著『道化の民俗学』15 - 26.
20. ヤン・コット著 峰谷昭雄・喜志哲雄訳 『シェイクスピアはわれらの同時代人』159 - 160.
21. ヤン・コット著 峰谷昭雄・喜志哲雄訳 『シェイクスピアはわれらの同時代人』159 -

22. Richard H. Lawson, *Edith Wharton*, 63.
23. R.W.B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, 248 - 250.
24. R.W.B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, 287.
25. R.W.B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, 286 - 287.
26. R.W.B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, 249 - 250.
27. ヤン・コット著 峰谷昭雄・喜志哲雄訳 『シェイクスピアはわれらの同時代人』 159.
28. Helen Killoran, *Edith Wharton: Art and Allusion*, 30.
29. Richard H. Lawson, *Edith Wharton*, 63.
30. Shari Benstock, *No Gifts from Chance: A Biography of Edith Wharton*, 250.; R.W.B. Lewis, *Edith Wharton: A Biography*, 326.

参考文献

《Primary Sources》

- Wharton, Edith. *A Backward Glance. The Complete Works of Edith Wharton*. Ed. Yoshie Itabashi & Miyoko Sasaki. Vol. 23. Kyoto: Rinsen Book, 1988. 1 - 400.
- , *Italian Backgrounds. The Complete Works of Edith Wharton*. Ed. Yoshie Itabashi & Miyoko Sasaki. Vol. 5. Kyoto: Rinsen Book, 1988. 1 - 171.
- , *The Letter of Edith Wharton*. Ed. R. W. B. Lewis and Nancy Lewis. New York: Charles Scribner's Sons, 1988.
- , *The Reef*. New York: Charles Scribner's Sons, 1965.
- , *The Valley of Decision. The Complete Works of Edith Wharton*. Ed. Yoshie Itabashi & Miyoko Sasaki. Vol. 3. Kyoto: Rinsen Book, 1988.
- , *The Writing of Fiction*. New York: Octagon Books, 1966.

《Secondary Sources》

- Benstock, Shari. *No Gifts from Chance: A Biography of Edith Wharton*. New York: Charles Scribner's Sons, 1994.
- Howe, Irving., ed. *Edith Wharton: A Collection of Critical Essays*. New Jersey: Prentice-Hall, 1962.
- Killoran, Helen. *Edith Wharton: Art and Allusion*. Tuscaloosa: The University of Alabama Press, 1996.
- Lawson, Richard H. *Edith Wharton*. New York: Frederick Ungar Publishin Co., 1977.
- Lewis, R. W. B. *Edith Wharton: Biography*. New York: Harper & Row, 1975.
- Shakespeare, William. *A Midsummer Night's Dream*. Ed. Brooks, Harold. 2nd ed. London: Thomson Learning, 2001.
- Wolff, Cynthia Griffin. *A Feast of Works: The Triumph of Edith Wharton*. Oxford: Oxford University Press, 1977.
- Wright, Sarah Bird. *Edith Wharton A to Z: the Essential Guide to the Life and Work*. New York: Facts on File, 1998.
- コット・ヤン著 『シェイクスピアはわれらの同時代人』 峰谷昭雄・喜志哲雄訳 東京：白水社 1968年
- 山口昌男著 『道化の民俗学』 東京：筑摩書房 1985年